

1994年8月21日(日) 決勝 時間 2時間17分(13時1分~15時18分) 審判 木嶋/清水/岡本/相沢

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	盗塁	失策
佐賀商(佐賀)	0	0	0	0	0	3	0	1	4	8	0	0
樟南(鹿児島)	0	3	0	0	0	1	0	0	0	4	0	1

佐賀商		樟南	
宮原俊次	2年	三振	二併
西原正勝	3	二直	三振
山口法弘	2	中安	投ゴ
田中浩一	1	二安	投ゴ
楠限正和	3	二ゴ	二飛
榎本謙介	2	二ゴ	二飛
立花和幸	3	二ゴ	二飛
吉田英隆	3	二ゴ	二飛
飯盛祐	2	二ゴ	二飛
諸隈輝行	3	二ゴ	二飛
斎藤博昭	3	二ゴ	二飛
林淳一郎	2	二ゴ	二飛
堤信二	3	二ゴ	二飛
加川寛之	3年	遊ゴ	二安
福留耕二	1	四球	二ゴ
有村浩一	3	投ゴ	一ゴ
福岡真一郎	3	投ゴ	三ゴ
田村恵	3	左安	右飛
谷口正吾	2	左二	三振
岩切大介	3	三振	三振
加地大我	3	三振	三振
鶴丸真也	2	四球	二ゴ
高田真次	3	四球	二直

**満塁本塁打**

満塁本塁打  
満塁本塁打  
満塁本塁打

満塁本塁打  
満塁本塁打  
満塁本塁打

**福岡投手**

投球回 9  
投球数 140  
打者 39  
被安打 11  
奪三振 7  
四死球 3  
自責点 8

# あの夏 1994年 佐賀商 × 樟南



九回2死、決勝では史上初の満塁本塁打を放つ佐賀商の西原。捕手は田村

9回を投げ合った佐賀商・峯(右)と樟南・福岡

## 全国選手権大会 決勝での満塁本塁打

第76回大会 1994年

佐賀商 8-4 樟南 (佐賀) (鹿児島)

同点の九回2死、西原(佐賀商)が左翼席へ勝ち越し弾

第89回大会 2007年

佐賀北 5-4 広島 (佐賀) (広島)

佐賀北が3点を追う八回1死、副島が左翼席へ逆転アーチ

第90回大会 2008年

大阪桐蔭 17-0 常葉菊川 (大阪) (静岡)

一回1死、奥村(大阪桐蔭)がバックスクリーンへ先制の一発

# 野球の神様 打たせた満塁弾

「薩摩隼人」対「葉隠武士」

当時の新聞には、そんな見出しが躍っていた。明治維新を推進した雄藩という歴史を持つ鹿児島、佐賀両県の男性気質を表す言葉だ。葉隠武士は、武士道の心得を論じた佐賀(肥前)藩の書物から。こんな大仰な言葉ではなくても、両県の気質を表す面白い言葉がある。「焼酎気質」と「日本酒気質」だ。

焼酎と日本酒では酔い方や二日酔いの程度が違ってくるから出てきた表現。県民性に詳しい矢野新一・ナンバードン戦略研究所所長によると、焼酎の消費量が多い鹿児島は熱しやすく冷めやすい気質だという。勢いに乗ると強いが、淡泊な面も併せ持つ。一方、米どころの佐賀は九州では珍しく日本酒の方がよく飲まれる。こちらは東北地方などに多い気質で、粘り強い面があるという。

酒席のネタを高校野球にあてはめるのは不謹慎かもしれないが、面白いことに、鹿児島の樟南と佐賀商が対戦した決勝はそんな両県の気質が反映されたような展開になった。先行した樟南に、粘る佐賀商が追いつく。そして、九回、佐賀商の西原の勝ち越し満塁本塁打で勝負は決した。「奇跡の本塁打」といわれたその打席で、西原は野球の神様が降り立ったような感覚を味わっている。13年後、同じ佐賀代表、佐賀北の副島浩史が放つまで、決勝の試合で満塁本塁打は西原だけの記録だった。その劇的なシーンは、改めて詳細に伝えたい。特異な夏だったと言っている。佐賀、鹿児島ともに初の決勝進出。大会の長い歴史でも九州勢同士による決勝はこの一度きりだ。

大方の予想は圧倒的に樟南の優勝だった。春に鹿児島商工から校名変更した樟南は、前年の春夏ともに活躍した福岡一田村のバッテリーを擁し優勝候補に挙がっていた。前評判通り力を発揮し決勝へ。鹿児島勢はその前年までの10年間で、夏に5度も8強入りしている強豪。待ちに待った深紅の大優勝旗は確実だと、多くの県民が思っていた。

佐賀は弱小県。1県1校の出場が定着する第60回大会より前は、甲子園出場さえ難しく、第42回大会で鹿児島が準決勝へ進んだ以外は8強入りもなかった。この年も佐賀商は無印の評価。接戦を勝ち抜いてのまさかの快進撃に、一気に応援熱が盛り上がった。奇跡的な優勝は県民を大いに勇気づけた。後年、朝日新聞西部本社の「私と高校野球」という企画で、佐賀商の優勝について読者の投書が紹介されている。「佐賀ってどこ？」と尋ねる多くの友人の中に、なぜか自分が佐賀出身であることが恥ずかしく思えた時もあった。しかし、佐賀の優勝でそんな思いもどこへやら。佐賀県人であることを誇りに思えた。

佐賀県民は、2007年の「がばい旋風」の佐賀北で再び全国制覇の喜びを味わうことになる。一方、鹿児島県民には夏の選手権優勝はいまだに届かない悲願のままだ。両県の野球史を大きく分岐させたこの試合、実際に戦った樟南の選手は多くは、今でも「10回試合したら9回勝てた相手」と言う。佐賀商の選手は多くは「もう1回やったら勝てなかった」と言う。なぜ佐賀商が勝って、樟南は負けたのだろうか。今回の取材では、何度も「神がかり的だった」という言葉を聞いた。では、野球の神様はなぜ佐賀商を選んだのか。ともに順風満帆の船出とは言えなかった新チームの秋から、その理由を探ってみる。

(このシリーズは吉村良一が担当します。敬称は基本的に略します)

全国高校野球選手権大会の名場面を振り返る「あの夏」の第7シリーズ、1994年の第76回大会決勝の「佐賀商-樟南」は、5月23日まで計34回(原則火~土曜日に掲載)を予定しています。